慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集「在日外国人・マイノリティの現在 : 移住と定住をめぐって」
Sub Title	
Author	柏崎, 千佳子(Kashiwazaki, Chikako)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.3- 5
JaLC DOI	
Abstract	日本の社会学において,「外国人」もしくは「外国につながる人びと」に関する研究がみられるようになったのは, 概ね1990 年代以降のことである。このうち, 在日韓国・朝鮮人(在日コリアン)を中心とする「オールドカマー」については, 社会内部のマイノリティ集団への関心を契機に, 差別, 民族アイデンティティ, 生活と意識, 集団間関係の諸相などが研究テーマとして取り上げられてきた。また, 1980年代以降, 新たに海外から渡日する外国人が大きく増加したことから, そうした「ニューカマー」への関心も高まり, 労働, 法的地位, 家庭, 教育の問題, 国や自治体の施策など, 幅広いテーマで研究が蓄積されている。 こうした問題群を扱う研究は,「国際社会学」としてくくられることが多く, 海外における移民研究(migration studies)の枠組みに照らして理解する試みも活発である。とくに近年では, グローバリゼーションを背景とするトランスナショナルな現象に関心が集まっている。 国民国家の閉じられた社会空間には収まらない存在として, 移住者とその家族をとらえることはたしかに有用である。しかし, 日本の文脈では, そのような視角ゆえに, 移民の背景をもつ人びとを日本社会の構成員ととらえる視点が乏しくなりがちでもある。 そこで, 本シンポジウムでは, トランスナショナルな現象をとらえる視角と日本社会におけるマイノリティという視角との関係を意識しながら, 外国につながる人びとをめぐる諸問題について, 各報告者・参加者とともに考えていきたい。その際, 「移民研究」や「国際社会学」という領域と他の研究領域(ジェンダー, 教育, 家族など)をどのように結びつけていくかという課題にも取り組むことができればと思う。
Notes	特集 : 在日外国人・マイノリティの現在 : 移住と定住をめぐって
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「在日外国人・マイノリティの現在――移住と定住をめぐって」

柏崎　千佳子

本特集は、2014 年 7 月 5 日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された三田社会学会大会のシンポジウムにもとづくものである。はじめに本シンポジウムの企画趣旨を紹介する。

【趣旨】

日本の社会学において、「外国人」もしくは「外国につながる人びと」に関する研究がみられるようになったのは、概ね 1990 年代以降のことである。このうち、在日韓国・朝鮮人（在日コリアン）を中心とする「オールドカマー」については、社会内部のマイノリティ集団への関心を契機に、差別、民族アイデンティティ、生活と意識、集団間関係の諸相などが研究テーマとして取り上げられてきた。また、1980 年代以降、新たに海外から渡日する外国人が大きく増加したことから、そうした「ニューカマー」への関心も高まり、労働、法的地位、家庭、教育の問題、国や自治体の施策など、幅広いテーマで研究が蓄積されている。

こうした問題群を扱う研究は、「国際社会学」としてくくられることが多く、海外における移民研究（migration studies）の枠組みに照らして理解する試みも活発である。とくに近年では、グローバリゼーションを背景とするトランスナショナルな現象に関心が集まっている。国民国家の閉じられた社会空間には収まらない存在として、移住者とその家族をとらえることはたしかに有用である。しかし、日本の文脈では、そのような視角ゆえに、移民の背景をもつ人びとを日本社会の構成員ととらえる視点が乏しくなりがちでもある。

そこで、本シンポジウムでは、トランスナショナルな現象をとらえる視角と日本社会におけるマイノリティという視角との関係を意識しながら、外国につながる人びとをめぐる諸問題について、各報告者・参加者とともに考えていきたい。その際、「移民研究」や「国際社会学」という領域と他の研究領域（ジェンダー、教育、家族など）をどのように結びつけていくかという課題にも取り組むことができればと思う。

当日のプログラムは以下のとおりで、4 つの報告とコメント、およびフロアをまじえての質疑応答・討論という構成であった。

1．坪谷美欧子（横浜市立大学）
　外国につながる子どもたちの高校進学――神奈川県立高校におけるニューカマー生徒の事例から

柏崎千佳子「特集『在日外国人・マイノリティの現在――移住と定住をめぐって』」
『三田社会学』第 20 号（2015 年 7 月）3-5 頁

２．李洪章（神戸学院大学）
朝鮮籍在日朝鮮人の「共和国」をめぐる語り――ナショナル・アイデンティティ論の視角から
３．福田友子（千葉大学）
パキスタン人移民のエスニック・ビジネスと越境する親族
４．鄭暎惠（大妻女子大学）
外国籍移住女性をめぐる問題――日本で定住することの困難
コメント： 塩原良和（慶應義塾大学）

このように 4 つの報告では、若い世代、移住女性、移民企業家など、外国につながる多様な人びとが取り上げられ、移住と定住、再移動、そしてそれらと関連するアイデンティティや価値観、地域社会との関係などが論じられた。コメンテーターの塩原氏は、「定住化」を前提とするのでなく、再移住や「往還」に着目する必要があることを共通理解としてあげ、同時に「抜け出せない人びと」や「あえて踏みとどまる人びと」への視点も重要と指摘した。

コメントへのリプライ、またフロアをまじえての質疑・討論を通じて、議論を深めることができたと思う。また、学会員以外でテーマに関心のある参加者が例年より多かったことも、企画者としてうれしいかぎりであった。

本特集は、シンポジウムの報告者とコメンテーターのみなさんに、あらためて寄稿いただいた論考からなる。

坪谷論文は、渡日してまだ数年という高校生を対象に、外国につながる生徒たちが、日本の「学校文化」をどのように受け止め、学校生活や高校で学ぶことに対してどのような意味づけをおこなっているのかをさぐっている。生徒たちの語りからは、日本の学校に「適応」させられているという面だけではなく、自らの視点で評価基準をつくり出したり、価値観を変化させたりする過程がうかがえる。

李論文は、世代を重ねながら日本社会に「定住」している在日朝鮮人、そのなかでも朝鮮籍をもつ青年に注目する。「朝鮮籍」に対する周囲の知識・理解が乏しいなか、朝鮮籍者のアイデンティティはさまざまなかたちで「本国」との関係に規定されざるをえない。この論文ではそうした制約のなかでのアイデンティティ構築の複雑性について、語りをもとに考察している。

福田論文は、パキスタン人移民の中古車貿易業の展開にともなう家族・親族の越境を「間接移民システム」のモデルを用いて論じるもので、トランスナショナリズム論の有用性をよく示している。日本人配偶者女性と子どもたちの海外移住あるいは再移住という現象を理解するには、ビジネス拠点のひとつとしての日本、そして親族ネットワークという視角を必要とする。

鄭論文は、新宿区で実施した外国籍住民と日本人住民への調査の結果を用いながら、移住女

性が日本社会で定住することの困難を論じる。「多文化共生」という標語が行政でも一般化するなかで、日常生活でのつきあいさえ乏しく、住民としての相互理解が進んでいない実態が浮かび上がっている。

なお、本号では、コメンテーターを務めた塩原氏にも、当日の議論を振り返って書き下ろしていただいた。

今回の特集が移住と定住、ホスト社会とマイノリティ、トランスナショナリズムといった視座にかんする議論を深めていく契機になることを期待したい。

最後にシンポジウムでご登壇くださり、本号に寄稿いただいた報告者とコメンテーターのみなさん、また当日参加くださったみなさまに、あらためて感謝したい。

（かしわざき　ちかこ　慶應義塾大学経済学部）